

Contents

性教育バッシングはなぜ?	1
成果発表会報告	2
Voice03 報告	3
難しさと向かうこと(03)	5
田口弘樹写真展報告	9
新宿東口イベント報告	10
学会探訪	10
活動報告	13
書評特集	16

性教育バッシングはなぜ?

ふれいす東京代表 池上千寿子

「あたま、あたま、あたまのしたには首があって肩がある、肩から腕、ひじ、また腕、手首があって手があるよ。胸におっぱい、おなかにおへそ、おへそのしたにはワギナ・ペニスだよ。背中は見えない、背中にはひろい、腰があって、お尻だよ、ふともも、ひざ、すね、足首、かかと、足のうら、つまさき、おしまい」

これは、知的障害をもつ子どもたちのための都立七生養護学校でうたわれた「からだうた」です。同校では1996年頃から性教育を始め、「こころとからだの学習」でつくったオリジナル曲がこれ、生徒だけでなく保護者、校長会にも好評だったそうです。

ところが昨年夏とつぜん、同校は「不適切な性教育」を理由に東京都教育委員会から処分をうけてしまったのです。都議会で「性器の名称を頭や、肩と並べて小学校の低学年から教えている。この突出の仕方は異常」と土屋都議につっこまれた教育長が「とても人前で読むことがはばかられる、きわめて不適切な教材」と答弁したとか。都議らが同校を訪れ同じく教材で使われていた人形(洋服をとると性器をちゃんとつけている)を没収し、同行した某新聞社記者がワザワザ裸にした人形をならべて撮影し「過激性教育」!! これをきっかけに東京都では小学校の性教育現場が大混乱、というか粛清モード。

いやはや、おそれいました。平成の性教育バッシング。ペニスやダメ(ペニスという医学用語をなぜわざわざ使うのか、と件の都議)ならおちんちん、チンコならいいのかな。北野監督のいう「ポコチン」はいかが? 小学校に行く前からみんな使ってるよ。それとも伏字? 「おなかのしたはベケベケベケ」とうたう、とか?

それにね、性器や性毛をつけた人形ってのは子どもの性被害者支援に関わる業界ではあたりまえに使っている大事な教材。わたしは20年前、ハワイの性被害治療センターで実物を見たけど、かわゆいもんです。これを「ひわい」と没収するのは「ひわいな発想」だわねー。

おっと、こんなつっこみが本稿の目的ではありません。つまり、一休全体なんで2003年に一気にこーなったの、ということなのです。

1985年男女雇用機会均等法、1995年育児介護休業法(男性も対象)、1999年男女共同参画社会基本法、2001年DV法という一連の法整備の流れをみると遅ればせながらにやら前進してるって感じがある。けれども、この流れを「遅ればせ」どころか「ゆきすぎ」と憤慨する人たちも少なくないのです。少年事件や外国人犯罪報道が多発するとできますね、「母親はどうなってるんじゃ」「日本の安全と秩序はどこへいった」で、一連の流れでできた民法改正(夫婦別姓とか)は「日本の美德である家族制度の崩壊」ということでおしつぶされた。そんななかで性教育に「ジェンダーフリー」だ「性の自己決定」だ「性と生殖の健康と権利」だとかでくるともーこれは癪に障るようです。自己決定とか権利というのは「無責任をあおるばかり」とうつらしい。「寝た子をおこすな、セックスをあおるな」反応とよく似てますね。ジェンダーフリーにいたってはトイレを同じくする気かとイキマク。ちなみにトイレはすべて個室、男女共同使用にしたら、安心して小学校で大便をできる男子がふえたそうですよ、よかったじゃん。でもそんなことよりなにより、男と女はちがう(という個人はみなちがうのよ)から「男らしさ女らしさ」を尊重せよがポイントであって、女らしさの根幹は母性なんです。それが失われて日本女性が子を産まないの本気で考えているらしい。そう少子高齢社会という呪縛。年金もパー、若者は未払い。どーなるのいったい。若者たちよ、無責任に走らずにどーぞ日本を愛して! 日本を守って!

いよいよ真打登場。そーです。教育基本法と憲法を改えようというお題目。「国を愛する国民を育てる」ために学校教育に介入するぞ! 引退させられたかの中曽根氏の最後の課題がこのふたつ。ウムム、てごわい。

「望ましい日本人」ってイメージがきつとあるんでしょう。男は強く、女はやさしく、男女あいむつみ家庭を作って子を育て、国を愛し、大儀に死す。ゲイ? 結婚しない男女、産まない女? 結婚もせずにイチャツク若者? でもって性感染? なつとらん!! ヒャー、こわ! なめたらあかんぜよ、みなさま。

研究成果発表会「若者を対象とした セクシャル・ヘルス・プロモーション」

研究成果を広く国民に知らせることを目的とした、エイズ予防財団からの助成制度により、ぶれいす東京は、10月11日に新宿、11月28日に神戸にて、成果発表会を行いました。



東京での成果発表会の模様

両日共、代表の池上千寿子による「性の保健行動とジェンダー」及び東優子（ノートルダム清心女子大学助教授）による「Sexual Healthとメディアの影響」の2講演を実施、併せて研究成果を盛り込んだビデオ「Let's CONDOMing」を上映しました。10月11日にはこれに加え、ぶ PEPメンバー4名によるパネルディスカッション「Sexual Healthのすすめ How & Why?」も実施しました。両日共数十名が来場、その職業も医療職の他、教育・福祉・NGO・学生・カウンセラー・行政関係者など多岐に亘り、「国民向け成果発表会」の目的を反映したものとなりました。

1. 「性の保健行動とジェンダー」

池上 千寿子

若者を男子・女子・MSM（男性とセックスをする男性）の3群に分け、コンドームを使えない/使いにくい要因を探りました。その結果、3つのグループの間において特徴的な差があることが判りました。つまり、コンドームを余り使わない女子の場合は「相手を好きだと自分からコンドーム使用を言い出しにくい」「相手が使わない態度だとそれに合わせてしまう」といった「相手との関係性」が、使わない大きな要因となっていたのに対し、男子の場合は「相手との関係性」は余り影響せず、「コンドームを使おうという明確な意思がないこと」が、使わない大きな理由として浮かび上がりました。この背景には、使わないリスクに対して楽観的だったり、スムーズな装着が苦手だったりといった事例があると思われれます。また、MSMの場合は、「相手との関係性」といった女子と同様の要因のほか、「その場のノリを優先する」という要因も特徴的に見られました。この結果を基にNGOであるぶれいす東京は、コンドーム製造企業であるJAPAN Medical社、10代の女性に人気の雑誌「POPTeen」と協働して、若い女性が手に取りやすい工夫をこらしたコンドーム「POPTeen」を開発、ファミリーマートなどのコンビニエントで販売しています。こうした「しかけ」によって、「面倒くさい」「言いにくい」といった「使わない要因」より、「性の健康を自分で考え、行動する」という「使う要因」を増加させていくことが、この研究のねらいです。

2. 「Sexual Healthとメディアの影響」

東 優子

若者の意識・行動・態度に影響を与えるIEC（情報・教育・コミュニケーション）の中から、「エイズに関する普及啓発パンフレット」と「人気テレビドラマ」という2つの材料に注目して、どういったメッセージが盛り込まれているのかを調査、報告しました。まず「エイズに関する普及啓発パンフレット」って数えだすと簡単に200に到達するほどたくさんありますが、分析に使ったのは調査実施時（平成12年）に国内で流通していたパンフレット57本です。感染経路・HIV抗体検査・電話相談といった基礎情報を記載しているのが全体の8～9割というのはある意味当たり前ですが、全体的に「似たりよったり」のパンフ



左から、AIDS&Society研究会議の野田和子さん、発表者の東さん、池上代表、エイズ予防財団の桜井賢樹さん

レットが多かったです（それでもなぜ作り続ける?）。疑問なのは、約半数ぐらいが訴える「不特定多数とのセックスが危険」（「愛する人とだけ」というメッセージの有効性。性感染症が見つかった大学生の6割が「相手が1人だった」と答えているという調査もあるわけで、「ウイルスは人を選ばない」という知識の徹底こそが大事なのでは? それから、9割が「エイズ予防にはコンドーム」を奨励しながらも、具体的な使用方法について書いているのは5割と激減。一番意外だった結果は、特に思春期の若者には現実的な選択肢の一つだと思われる「セックスをしない」というセーフ・セックスのありようについて情報提供していたのが1割程度と極端に少なかったこと。今後は、対象者や目的を絞って、バラエティに富んだパンフレットができるといいですね。

次に、「人気テレビドラマの描く性行動」ということで対象としたのは1997年から2001年まで過去5年間に放送された人気連続ドラマ25本（平均視聴率は20.3%）です。いわゆるラブシーンという意味ではセックス描写（会話も含む）30%、キス21%、抱擁11%といったところですが、情報としての妊娠・中絶・出産が7%、性風俗などが5%であるのに対して、コンドームや避妊は1%、エイズを含む性感染症に至っては0.3%しかない! つまり、多種多様な性産業や性風俗に関する情報が氾濫するドラマにおいて、性の保健行動に役立つ情報は皆無に等しいのです。またその他の考察から、ポテンシャルな性の保健行動の阻害要因として、(1)言語的コミュニケーションに関するロール・モデルの欠如、(2)他者依存的展開、(3)恋愛至上主義、などが指摘されました。

3. パネルディスカッション: Sexual Healthのすすめ How & Why?

野坂祐子（武蔵野大学心理臨床センター）の司会により、ぶれいす東京の若者グループ「ぶ PEP」メンバー4人によるディスカッションを実施しました。当日は、「ぶ PEP」が、ピア・エデュケーターの立場から、セクシャル・ヘルスにまつわる体験談や、学校等での予防啓発実践の取り組みを報告し、ピアの有効性や具体的手法についての議論を展開しました。また、ディスカッション後、フロアとの交流を目的に、参加者と活発な質疑応答が行われました。

当日の反響

2つの講演については、当日、「個人の意識が変わったり高まることで、全体が変わっていく』『性の健康行動の促進』という立場から、セクシャル・ヘルス（性の健康）を語る場を設けたのは素晴らしい」などの意見が寄せられました。また、ぶれいす東京の実践例としてのコンドーム「POPTeen」については、買える場所・デザインなどにつき多くの質問が寄せられ、青少年の教育・啓発に携わる現場の参加者に対しての大きな反響が感じられました。

パネルディスカッションでの「若者自身が若者の性を語る場の設定」という試みに対し、「若い人がその人なりの思いをもち伝えようとしていることが素晴らしい」との意見が多く寄せられました。その理由は、「『教える・教えられるという関係をのりこえる』という姿勢に共感した。」という参加者の感想に集約されていると感じたひとときでした。

（全体報告：吉田成美）

Voice03 Anniversary ~それぞれの記念日~

恒例になったゲイ・バイセクシュアル男性向けHIV啓発イベント、Voice03(主催: ぶれいす東京/後援:財団法人エイズ予防財団)が11月29日に四谷区民ホールにて開催された。出演者72人、当日ボランティアも含めたスタッフが53人、激しい雨が降ったにもかかわらず観客動員が411人と、例年を上まわる盛況であった。



司会はおなじみ、ベースけ & エスムラルダ

2003年のGフレは、レズビアン&ゲイパレードがないということもあり、大型イベントを夏と冬に開催した。どちらのイベントも、準備期間を相当とっていたはずなのだが、やはりのんびりしていたGフレメンバー、直前になって慌てて作業をする日々を過ごした。イベントの存在意義や形態を考え直す時期に来ているかなーという印象を持つこともある反面、夏と冬のイベントが恒例化してきている感もあり、マンネリ化せず常に新鮮な企画をお届けしたいと思っている。

今回のVoiceでは、自分たちの弱い面を強化することや、過去のレビューを踏まえつつも新たな試みに挑戦している。ここでは、当日の様子を報告する。

司会は、このイベントのみならず様々なゲイイベントで活躍中のベースけさん & 東京都公認大道芸人ドラッグ・エスムラルダさんのお二人。ボケとつつこみ具合は、他の追随を許しません。

ぶれいす有志も参加してのドラッグショーで幕を開けた第1部は、親式(chika-chika)さんとNOBBY(from GOLDEN ROSE)さんのステージ。お二人とも、パレードからアップテンポなものまで、じっくりと聴かせてくれる。年末を迎える私たちをしみじみさせてくれた。

今年のぶれいすの新機軸の一つが「映像」面の強化。時間に追われながら作ったビデオ「LOVE for LIFE ~僕たちの記念日~」の上映。制作は困難を極め、一時はどうなることやらと思ったが、上映後は、会場の皆様から暖かい拍手を頂き、スタッフ一同「ホッ」。

第2部は、今回初参加の弦楽合奏団の「ディベルティメント」。これも、昨年の新機軸、「新しいことをやってみる」を実現させた。残響等、音の問題が生じるかなあと思っていたが、完璧ではないにせよ、弦楽の素敵な響きをお届けできたかなあと思う。チャイコフスキーとテレビドラマテーマ曲のメドレー、さらには、指揮者?エスムラルダさんとのコラボレーションまでやっていただいた。

次は、毎度おなじみの男声合唱団「Skin Echo」。ブラックアメリカンの曲から数曲と日本の曲数曲を歌っていただいた。歌唱力はもちろん何も言うことがないくらいの「上手さ」だ。自分たちの演奏会を翌月に控えているにもかかわらず、このVoiceのためだけに練習に励んでくださって感謝している。

最後は、ピアニストベースけさんの「昭和歌謡大全集」。70曲以上に及ぶ歌謡曲メドレー。圧巻。



フィナーレはみんなで
“世界に一つだけの花”

フィナーレは例年のごとく、全員で合唱。今年は「世界に一つだけの花」を歌った。

ロビーでは、「LIVING TOGETHER manual」の写真を撮っていただいた、田口弘樹さんの写真展が行われ、好評を博した。

また、コンドームの販売を「コンドマニア」さんの協力により行った。

今回も会場の映像、音響その他を「スタジオ・スタッグ」さんにほとんどお願いする形となった。毎回技術面で不安なくステージを進めることができ、とても感謝している。準備が遅れがちな私たちだけ

ど、これからも懲りずに付き合っていたいただければ幸いである。

当日のスタッフの動き方も、イベントになれてきたこともあって、スムーズだった。でも、今年は準備、早めにやろうね。

(文責: たけろう)

Voice03 アンケート報告

来場者の約半分からいの方にあたる193人がアンケートに協力してくれた。

来場者の年齢は、30代:47.3%、20代:31.5%、40代:14.5%、10代:3.0%、50代:2.4%、60代:1.2%となっており、20~30代で8割をしめていた。また、居住地域は、東京が61.1%、神奈川:11.4%、千葉:8.8%、埼玉:4.7%となっている。また、栃木、長野、茨城、静岡、京都、沖縄からの参加者も見られた。

来場の目的は、4割の人が「楽しむため」、3割が「情報を求め」、15%の人が「友達を見に」と回答している。

リピーターの割合は、初回参加が49%、2回目が24%、3回目が19%となっている。毎年このイベントを楽しみにしてくださっている人がいることがわかる。

自由記述へは、多くの書き込みがあったが、一部を紹介する。

Q 今回のイベントに参加してSAFER SEXやHIV/AIDSについて何か考える事があった、考え方が変わった点がありましたら、ご紹介ください。

「これをきっかけにHIV検査に行こうと思った。」

「これからSEXする時は必ずコンドームを使おうと思った。」

「HIV/AIDSがより身近に感じられ、決して他人事ではないとつくづく思った。そして、もしも自分が感染した時、または、友人が感染した時、どう対応したらいいか考えさせられた。」

「感染者が身近におらず、自分も検査した事がないので、HIVについて考える機会が普段はなかなかなかったが、SAFER SEXをしようとして認識するきっかけが出来たので来てよかった。」

「今年知り合った彼がHIVなので、他人事ではないのですが、HIVだからということで、特に意識しなくてもいいということを再認識しました。これからも二人で頑張っていきます。」

Q Voice03についてのご意見、ご感想があれば、ご自由にお書き下さい。

「毎年、来ようかどうしようかと悩みつつ結局あきらめていましたが、今年は思い切って足を運んでみました。意外にも敷居が低く、安心して楽しく見ることができました。来年も是非見に来たいです。」

「エスムラルダさんとベースけさん二人の時間をもっと長くして欲しい。」
「はじめてでしたが、とても明るくてパフォーマンスの質の高さには驚きました。とても楽しい3時間でした。」

「一週間ほど前に偶然ネットで見つけてきただけであったが、参加してよかった。内容も充実していて、時間がたつのが、あっという間だった。来年も来ます!! これからも活動を続けていってほしい。」

「AIDS/HIV的な内容が薄く、ただのショータイムと化しているような感じがした。もう少しHIVについての話し合いをする場があったり、HIVの勉強コーナーがあってもいいのではないかなと思った。」

「毎年楽しませてもらっています。前年より、後年のほうが、ずっとおもしろいです。来年のVoiceにも参加させていただきますが、出来れば年1回のみならず2回は実行して欲しい」
「ドラッグのショーをもっと入れて欲しかった。」
「『LIVING TOGETHER』と『LIVING TOGETHER manual』はセットで持っているといいので、一緒に配って欲しい。」

(まとめ: ぶきの/ふかい)

LIVING TOGETHER manual

2002年のVoice02では、陽性者の手記とHIV/AIDSに関するQ&Aを加えた小冊子「LIVING TOGETHER」を作成しましたが、Voice02にて配布後も、問い合わせや配布希望が多く寄せられ、大変好評でした。今回のVoice03では、その好評だった「LIVING TOGETHER」の続編として、実際に検査を受ける方法や、Safer Sexの楽しみ方を紹介した「LIVING TOGETHER manual」を制作することになりました。



LIVING TOGETHER manual

今回の「LIVING TOGETHER manual」の中心となるビジュアルとして、ゲイ雑誌で活躍中のカメラマン、田口弘樹氏に写真撮影を依頼。また、ゲイ雑誌でグラビアに登場したTOMOさんとKAZUYAさんにモデルをお願いし、この「LIVING TOGETHER manual」の為に、写真を撮りおろしてもらいました。二人の自然なスナップに加えてシャワーシーン等もあり、とても素敵なビジュアルができあがりました。

内容の方は、シチュエーション別のSafer Sexの楽しみ方、行為別Safer Sexの方法を解説、また検査を受けるときの心構えや、実際の検査の受け方、実際に陽性だったときに必要なこと等を紹介、これにモデル二人の写真を使いページを構成しました。加えて南新宿検査室体験レポートと、薬局等で広く市販されるようになった検査キットの使用レポートをビジュアル入りで紹介しています。またマイフェイバリット Condom・用途別のCondom紹介コーナー等盛りだくさんの内容で、豪華な一冊が完成しました。

Voice03では出演者及び来場者、約500人にこの「LIVING TOGETHER manual」を配布し、VOICE終了後も引き続きイベント等で配布を行ないました。今後もイベントやバー・ハッテン場等で配布を予定しています。

またこの「LIVING TOGETHER manual」のときに撮影した、田口弘樹氏の写真展も行われることになりました(詳細はP9参照)。

(おやかた)

LOVE for LIFE ~僕たちの記念日~

出演: 堀栄一郎、荒俊樹、森川佳紀

制作: ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS

後援: (財)エイズ予防財団

Gay Friends for AIDSの主催する年末恒例のイベント・Voiceでは、出演者の皆様によるパフォーマンスのほかに、Gay Friends for AIDSのオリジナル啓発プログラムのための時間が設けられています。これまで、陽性者をゲストに迎えてのトークショーやインタビュービデオ、陽性者を主人公にした劇などによって、来場者に、楽しみながらHIV/AIDSを身近に感じてもらうよう努めてきました。そして、今年度のVoice03では、ここどころぶれいす東京内で、わかに高まっているビデオ熱の煽りを受け、10月なかば、オリジナ

ル・ストーリー・ビデオを制作することに決定したのです。

ビデオのコンセプトは、まず第一に、「感染を知ったらどうなるか?」を、観客にバーチャルに体験してもらう、ということでした。そこで、主人公を、Voiceの主な客層・ターゲットである20代後半に設定し、彼が感染を知ったところから物語がはじまる、ということが決まりました。しかし、それ以上のシナリオはまったくの白紙の状態。シナリオ執筆経験のまったくないスタッフが、手探りで叩き台となる台本をつくり、ミーティングを行って皆の意見を取り入れ、番組制作のプロの方の意見も伺い、訂正を加えるという作業を繰り返し、11月に入ってようやく台本が完成、出演者も決定し、撮影に入りました。

今回の撮影は、11月の連休をつぶしての強行スケジュール。4日にわたる撮影で、ロケ地も、スタッフ宅・二丁目のバー・クリニック・検査所・新宿ビル街・夜の某JR駅~住宅街など、様々な場所を、出演者とスタッフが機材を抱え駆け回りました。

出演者には、今回、主役級の3人は劇団の方にお任せすることになり、台本が出来上がった時点では、台本の素人っぽさから、説得力のある画面をつくるには、かなりの演技力を要するのでは、と危惧する声も聞こえたのですが、実際に撮影してみると、プロ級の役者さんたちの説得力のある演技力にかなり助けられたように思います。

最後の編集は、プロの方のご協力もいただき、なんとかVoice当日には間に合うように編集が終わりました。評価としては、陽性者の気持ちがよくわかった・陽性者としてよくあるシチュエーションを表現している、などの感想がある一方、友人・親などとの関係についてもう少し突っ込んで描いて欲しかった、などの意見もありました。今回は、さまざまな制約上、主人公と恋人との関係が中心のストーリーとなったのですが、友人や親、職場など、周囲との関係を描いた物語を語ることも必要であると思われます。

なお、このビデオは、今後も、様々なゲイ関連のイベントでの上映や、DVD化してバーなどに配布する計画があります。そのさいには、時間の制約上、泣く泣くカットしたシーンなども加えた完全版が再編集される予定です。かしまし三人娘が大活躍のシーン等、みどころはたくさんありますので、Voiceでご覧になった方も、まだ見てないという方も、ご期待ください。

最後になりますが、今回のビデオの作製には、様々な方の協力がありました。出演者をはじめ、場所を快く提供していただいた皆さん、どうもありがとうございました。ISLANDSのRAKUさんには、バーのマスター役としてもご活躍いただきました! また、バーのお客として画面に華をそえてくださったCGSU(学生サークル)の皆さんにも感謝です。このビデオの作製にかかわったすべての方に、改めて心よりお礼申し上げます。

(ひのりーぬ)



告知のシーン(都・南新宿検査相談室のDr. 山口が出演)



ほかのHIV陽性者と会う。“元氣そうだなあ”



パニックってしまった彼氏と再会。“僕たちの再出発の記念日だね”

難しさと向かうこと

様々な立場にある人が、どう難しさに向き合っているかを取り上げていくこのシリーズ。第三回は、免疫機能障害者の採用に積極的に取り組んでいる企業の人事部のAさんに、お話を伺いました。企業によって、個人によって、問題意識も抱える難しさも異なりますが、Aさんのお話から、HIVと就労にまつわる重要な課題が見えてくることは確かです。

(聞き手：生島 嗣)

(03) 人事・採用担当者の向き合う難しさ “免疫機能障害者の雇用をめぐる”

Aさんが人事部のマネージャーとして、初めて職場でHIVに出会ったのはどういったいきさつだったのでしょうか？

障害者雇用にあたって求人活動をしていたとき、障害者を専門に紹介してくださるエージェントからお話があって、一人の方をご紹介いただいたんです。はじめは感染症と聞いていたので何のことだろうと思っていましたが、後日、免疫機能障害、つまりHIVだということが伝えられました。

私自身はまったく問題がないと思いました。基本的には就労に問題がないという知識がありましたし、それに、なにより、うちの会社が大切にしている方針として、ダイバーシティ（diversity：多様性の尊重）というのがありました。ひとりひとりの個性を尊重し、表面的な属性にとらわれずに、その人が本当にどういう人なのかを理解した上で、会社に貢献できる力をお持ちの方であれば、むしろそれを生かしていただこう、それが人事あるいは人材育成の基本であるという考えです。そのことからしても、HIVだからどうこう言うということは考えられませんでした。

人事部全体の受け止め方はどうだったのでしょうか。

当時この案件にかかわっていたのが私プラス3名で、私の上司と、スタッフ2名です。上司はダイバーシティということをとっても大切にされていて、むしろ積極的に進めたいと考えていました。スタッフ2名もやはり、会社の方針を理解していたので問題ありませんでした。

エージェントからの紹介があって、人事部内での書類選考、そして、次はどういうステップになるのですか？

配属する予定の部署に話を持っていきます。その部署のトップである部長クラスと、直属の上司の課長に話をしました。部長は就労上問題がないのであれば全然かまわないということでした。課長も賛同してくれて難なく通過。

次に、HIVのことを社内公表するかどうかということがキーになったんです。それで、ご本人とも、配属先の部課長とも話し合いをした結果、今知っている範囲に情報をとどめるということになりました。理由は、我々の意識とは別に、社会一般がHIVのことをどういう風に見ているかということも知っていたし、ダイバーシティを掲げてはいたけれども、社内にその考え方が浸透しきっていないわけではないという判断もありましたので、「ちょっと早いかな」という気がしました。ただ、当時は、今もそうですが、余程の事情がない限り採用を控えていた関係で、障害者雇用であることは明らかにしなければなりません。つまり、障害者であれば、法定雇用率（障害者雇用促進法が企業などに義務付けている障害者雇用率/民間企業は1.8%）の件があるので、採用の必要性があるわけです。そこで、配属先の同僚には病名は告げず、内部障害という

ことにとどめておくことにしました。

実際に採用、配属が決まり、働き始めたわけですね。その後はいかがでしたか？

実は、しばらくして、ご本人の口から、病名が同僚に伝わってしまうという出来事があったんです。ご本人は同僚たちと年齢が近いこともあって、わりとすぐ仲良くなって、プライベートなこともいろいろと話すようになったらしいんです。そのうちに、病気の話にもなって、ひとりの同僚が「それってエイズじゃん」って言ったら、ご本人は「そうです」と答えたんですね。同僚たちは、全然そういうことを予想していなかったので、非常に動揺してしまいました。それで、その同僚が、上司である課長、つまり病名を知っている人に相談をしたんです。彼からも、いろいろ説明したんだけども収まらなかったんです。そこで、人事部のほうに「ちょっと困ったことになっている」と報告がありました。

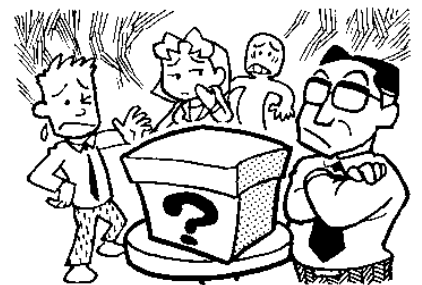
そのとき、人事部のみなさんは、どのように対応したのですか？

とにかく雇用を継続することは明らかなので、あとは動揺をどう抑えるかということがポイントだったです。人事のほうからも同僚の人たちに話をしましたがダメでした。「ひどいじゃないですか、何で言ってくれなかったんですか？」とか「私たちに何かあったらどうするんですか」とか、不安や疑問や、会社に対する不信感が提示されて、ほんとうに困った状況だったです。

感情レベルでの反応が強かったんですね。

ええ、そうですね。それで私もいろいろ考えました。ある程度問題が広まってしまったのだから、会社の中で公表するとか、そこまでしなくても、たとえば部長会で報告して了解を得ておくとか...

ところが、私の上司は別のアイデアを持っていました。今の段階では説得をしても無理ではないか。HIVがどういうものなのか、自分たちもよく知らないのだから、まずそれを勉強したほうが良いのではないかと。その通りだと思いました。そこで、お医者さん呼んで勉強会をやることにしました。ぶれいず東京にいろいろ相談させていただいたのはこのころが始まりだったと思います。



勉強会には主治医の先生が来てくださることになりました。配属先の部署全員と、人事部全員、そしてその方を紹介してくれたエージェントの担当者が参加しました。ご本人は了解のうえ、参加しないというかたちをとりました。先生はほんとうに良い話をしてくれました。2時間たっ

り、一生懸命、スライドまで持ってきてくれて。HIVってどんな病気なのか、エイズとHIVの違いは何かとか、もともとどういう歴史で世の中に広まって、何が原因で偏見を持たれるようになってしまったのか、現在の治療法がどんなものかとか…

質疑応答の時間も作り、私もいくつか質問をしました。ひとつは「同じ職場の我々は、どういうことを気遣うべきなのか」と聞いたら、「何もなくてけっこうです」という答えでした。「まず、本人が病気のことをよく知っていて、大人なんだから、まわりの人がとやかく言ったり心配したりする必要はまったくありません。お宅の会社にも、いろいろな病気を抱えている人がいるでしょうけど、あなたは心臓が悪いからドーコーとか、あなたは糖尿病だからドーコーとかいちいち言わないし、別に発表したりしないでしょ」と。

もうひとつは、「HIVは、他の感染症にくらべてどうなんですか」と聞きましたら、感染力はきわめて低い、B型やC型肝炎のほうがずっと感染力が強いという答えでした。当時、会社にはB型肝炎の社員がいて、まわりもそれを知っていて普通に一緒に仕事をしていましたから、なーんだ、って思いました。

それから、みんなが心配していたのは、もし怪我をした場合のことでしたが、それに関しては、そんなに恐れなくてもよいと言われました。大量に出血して湿っていて、自分も怪我をしているというような状態でなければ心配することはない。それよりも、HIVの人は免疫が落ちているので、そういう時は、ばい菌などから本人を保護するためにきれいなタオルをでくんであげてくださいと教えてくださったんです。我々は自分たちを守ることばかり考えていたんだと、その時はじめて気づきました。

そんな話を2時間ピッタリと聞いた後は、みんなへロンと解けてしまい、一種独特の感動がありましたね。今でも思い出します。新しい世界に触れた感動ですかね。

動揺した同僚の方々の変化はどうだったのですか？

良い変化だったですね。「参加してよかったです。勉強になりました。ありがとうございます」と言っていました。恐れていたり、怖がっていたりしたものがどんなものだったのかわかって、不安が解消したのだと思います。雨降って地固まるといった感じですね。

それから、ひとつ興味深い話があるんです。同僚のひとりが、勉強会後のある日、本人に、「もし何かあったら私のことを守ってくれる？」と聞いたんです。本人が「守るよ」と答えたそうなんです。それで「本当に安心できた」と言っていました。人間というのは、理屈だけでなく、感情的に感覚的に納得するというのが必要なんだな、そういうコミュニケーションが大事なんだなって思いました。一連の出来事あと、むしろ職場の連帯感が高まったという産物も得られ、それこそ望外の喜びでした。

採用決定までのプロセスというのは、外からは見えないものですが、Aさんの会社ではどんなステップがあるのでしょうか？

まず、ポストがあるということ、ヘッドカウントがあるということが条件になります。これは外資系企業特有の用語かもしれませんが、年間にどれだけの予算で何人を抱えて会社を運営していくのかというのが毎年ガッチリ決まります。その人数、頭数のことをヘッドカウントと言います。誰かにやってもらいたい仕事があると、その仕事をやる人間が社内にいるか、いなければ社外から採用しようということになります。外から採用しようということになると、いろいろな方法で候補者を探し集め

て、書類選考をし、面接をして、最終的におひとりに決める。応募された方も、我々を選ぶわけですから、お互いの意思が一致すれば採用ということになります。

人事部はそのプロセス全般にかかわりますが、最終的な決定権は現場にあるんです。ですから、部署の長の意思は重要です。免疫機能障害に関しても、人事がOKで、現場ではまた違う反応があるということはありません。

その後も免疫機能障害者の採用に取り組んでいるのですね。

はい。人事の役割は、空きポストに合ったスキルを持った人をいかに集めてくるかということなんですが、HIV陽性の方々は、直接お目にかかった経験からすると、実務経験が豊富で、スキルの高いたがが多いという印象がありましたから。採用活動で求人情報を流すときも、「今までどういう障害の人を採用してきたことがありますか？」という質問の欄に、免疫機能障害と記入して、HIVのかたに応募してもらおうとアピールしてきました。

ただ、障害者雇用に関わる担当者は、人事部の中でも増えました。全員が同じ認識を持つことが必要なので、部内での意思統一や情報の共有には力を入れました。そして、やはり、部署長の理解を得るのが重要ですね。どんな問題でもそうですが、現場の人たちが本音の部分でその気になってくれないと、何だかんだいっても、絶対進まないです。

2つめの成功例をお話いただけますか。

ある候補者の方が、スキル、人柄ともに、我々の求めるものを満たしておられ、この人なら部署も気に入ってくれて、十分に戦力になってくれると判断できたので、その部署の部長に会ってもらいました。OKでした。次は課長です。まずは経験やスキルを判断してもらうために障害名には触れずに面接をしてもらったんです。幸いにも気に入ってもらえたので、次に病気のことを話しました。すると、「HIV？全然問題ないです」との反応でした。その人は前にアフリカに駐在していて、さまざまな感染症を見てきた経験があって「HIVよりツエツエエの方がもっと大変なんですよ…」と話し始めたんです。これでクリアー。

この部署では、入社の前に同僚のみんなにもきちっと説明をしておきたいという意見でした。私としても、一番目のケースの経験から、障害名は公表しておいたほうがよい、きっちり情報提供をすれば大丈夫という自信がついていたので、前回やったような勉強会を開くことにしました。勉強会、やりたかったんですよ。こういうことをすることで、もちろんHIVに関する偏見も少なくなっていくだろうし、ダイバーシティーや障害者雇用の意識も高まると思うんです。ちなみに、この時点では、まだそのポストの候補者は絞り込まれていなくて、非常にいい経歴、スキルをお持ちの二人のかたが残っていたんですが、お二人とも免疫機能障害者でした。勉強会をして部署にオープンにすることに関して、候補者のかたと適宜話し合いを持って、確認をしながら進めていきました。

今回の勉強会は、前回のように、陽性者が現実に職場にいて、同僚が動揺しているといった緊迫した状況ではなく、一般的な情報提供の色彩が強かったのですが、これから関係者になる人にちゃんとした情報と会社の姿勢が伝わるという効果がありました。参加者にアンケートをお願いしたんですが、ほとんどの人が、免疫機能障害者を迎えるにあたって、不安は「まったくない」ほとんどない、勉強会は「大変良かった」良かったと答えてくれたんです。コメントや質問もいろいろ書かれていました。「その人がエイズを発症したら、会社は、解雇してしまうのですか？」「障害名の公表までしてうちの会社に入りたいと言ってきていることに感謝したい」といったものから、「特に問題ありません。何で今さら大騒

ぎするんでしょ」採用が決まってから、報告をしてくれればそれで十分だったと思います」一般的な話より、陽性者と日ごろ接しているカウンセラーの話の方が実感が得られるのでは?」など、反応はさまざまですが、私の予想以上に社員の意識は高いんだという感想を持ちました。それからもう一つこんなコメントもありました。「その人の障害を理解したうえで無関心でいることが大事だと思う」これぞダイバーシティーの本質、と思うと涙がでそうでした。理解し受け止めている暖かみ、そして必要ない限りとやかく言わないそっけなさ、これですよね。

勉強会やってよかったと思いました。「今さら」という人もいましたけれど、やっぱり、やるべきステップだったと思います。それがなく突然採用していたら、前回のように動揺する人が出たかも知れません。

部署内でオープンにしたわけですが、健康情報というきわめてプライベートな情報が、どのようにコントロールされていくのでしょうか?

その人の障害名を、あとから知った社内外の人が不安を持ちたり、動揺したりすることはありえるわけだけれど、いちいち関係者が増えるごとにその人にプライベートな情報を伝える必要はないですよ。それで、指針を作成しました。それは、その人は配属部署では完全に公表するけれども、それ以外には積極的に障害名を告知することはない。それはプライバシー情報だからです。新入社員が入ってくるたび、実はこの人便秘なんですなんて言わないのといっしょです。ただ、もし社内外の人から聞かれたら、「我々はその人の病気を理解した上でいっしょに働いている仲間です」と答えるということを指針として関係者全員にメールで回しました。

それで、いよいよ受け入れるということになったんですね?

お一人の方に決まりまして、これまでの経緯なども再度説明して了解のうえ、入社ということになりました。その人は、入社当日に初めてその職場にお目見えするわけですよ。その段階でみんなは病気のことは理解しているわけです。部長から職場の同僚に紹介されて、拍手で迎えられていました。いま現在、ご活躍中です。

最初のケースと、二つ目のケースでは、人事部でもいろいろなことが変わったと思うのですが。

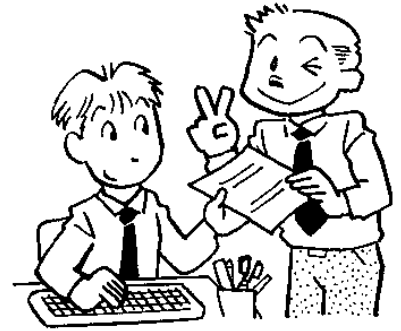
最初のケースでは、担当者の数が非常に限定的だったので、「私がぶれな^い」ということと、ごく少数の「スタッフをぶれさせな^い」ということで済んだんですけれど、その後関係する人も増えたので、皆が同じ意識で動けるようにという点を重視しました。とにかく情報を出してコミュニケーションしながら進めていく、私一人がスペシャリストになるのではなく、いろいろな人とシェアしながら、みんなが同じように対応できるようにといった方向を目指すようになりました。実際、2例目の受け入れ態勢作りでは、新しい担当者が大活躍で、嬉しかったです。

HIVに取り組んできて、予想もしていなかった効果があったといううなことはありましたか?

たとえば先ほど話した勉強会後のアンケートに、「抗体検査の情報を社内でも流せば、検査を受ける人がいると思う」といった記述がありました。もしかしたら、予防などの効果もあるかも知れませんね。

あと、最近思いがいたるようになったんですけれども、うちの会社の中に、誰にも言わないけれども陽性者の方がいるかも知れないですね。HIVのかたが、堂々と障害者雇用で入ってこられたこととか、勉強会が行われたり、HIVを差別してはならないということがハラスメント撲滅

のポリシーに盛り込まれたりしたことを知って、その人は、一生職場では黙っているかも知れませんが、少しは安心するんじゃないかなあと。逆に、そういう人がいるかもしれないという意識を持っていないと、無意識のうちに傷つけていることもあるかも知れません。



それから、総務部のほうでは、HIVに限らず、社員が職場で万一大量に出血した際に、どう対応すべきかということ、社内でも共有しておいたほうが良いということになって、産業医と相談して対処方法を全社員にメールで流しました。

そして、なんとといっても、ダイバーシティーという、いろいろな人を受け入れるという意識が高まったと思います。うちの会社では、年に一回社員の意識調査をやっていて、いろいろな項目について、社員が、会社のこと上司のことを、どう見ているかというのを点数をつけてもらっています。その中にダイバーシティーの項目があります。会社はダイバーシティーを大切にしていると思いますかとか、あなたの上司はダイバーシティーを実践していますかといった質問がいくつかあるんです。免疫機能障害者を受け入れた部署は、他の部署に比べて点数が突出して高かったです。これは効果があったんだと思いました。

これらの事例を通して、AさんはHIVにかかわりが深くなったわけですが、何がそうさせるのでしょうか。引きつけられる理由があるのでしょうか?

世の中で、否定的に扱われていることに対して、自分の意思で良いことをやったという気持ちが1例目のときにあって、それは、個人としても、会社の人事担当者としても喜びだったですね。この小さな私にもできることがあるんだって思いました。その最中は必死でしたから、意味とか価値とか考えていなかったです。自分はまったく問題ないと思って進めてきたことが思いもかけずに大問題になってしまって、何とか解決しなければならぬという一念でした。でも、あんなに動揺していた同僚たちからありがとうございました、いい勉強になりましたと言ってもらえることができちゃった。その喜びですかね、担当者としては。

それから、HIVのかたと接しているうちに、面接にすら行き着けず苦勞をしている実情を知るようにもなりました。ひとつの突破口になれるのであれば、しかも自分の業務の範囲でそれができるのであれば、やはり私はするべきなんじゃないかと。

もともと私自身が、ユニークであることに価値を置いていることもあります。子供のころから親にそう育てられていて、小学校のとき、ランドセルが黄色だったんですよ。うちの親に、女の子はみんな赤いランドセルで面白くないから、あんたは違う色にきなさいって言われて、いくつかの色の中から黄色を選んだんです。今でも、有名ブランド品は持ちたくないみたいな、偏屈なところあるんですよ。(笑)

Aさんのお話を聞いていて、特殊例ではないかと思う人も少なくないかも知れません。日本の多くの会社で、同じようなことを考えている人が、はたしてどのくらいいるのでしょうか? 突破口になる人をどうやって探し出したらいいのでしょうか。

難しい質問ですね。社内でも「HIVって聞いただけでドキッとすよね」って言う人がいました。これも世の中だとすると、なかなか厳しいですよ。1例目の話のように、親しくなった同僚に打ち明けたら、思いもかけずに大騒ぎになってしまったり、あるいは、2例目の課長のように、「HIV? 全然問題ないですよ」って言うてくれたりする。頭で考えているだけでは、多くのことはわからない。実感を伴わないところで、あれこれシュミレーションしても、人の心の不安とか恐れとか受容性といったものは読めないです。だから、ひとつひとつ実例を作っていくしかないのだと思います。

就職活動においては、たとえばセクシャルハラスメントにきちっと対応しているかとか、多様な人材を受け入れているか、女性管理職の数はどのくらいかなど、会社のポリシーをチェックすることはできるとは思います。

それから、今すでにどこかの会社で病名を伏せて働いている陽性者にとっては、人事でも上司でも誰でも良いのだけれど、きちっと受け止めて対処してくれる人、あの人がそうだって確信できる人がいれば打明けてもよいだろうけれど、そうでなければ「言うてごらん」とは言えないですね。陽性者の方々をはじめとして、いろいろな関係者との接触を通じてこの問題の難しさを知るにつけ、そう思うようになってきました。

1例目の混乱が、2例目そしてそれ以降につながっているわけですよね。やはり、ひとつずつ試行錯誤して積み重ねていくしかない?

そうですね。いま、成功すれば3例目という案件を抱えているのですが、時間がかかりそうです。候補者のスキルや人柄は条件を満たすのですが、進めます、という報告が現場からまだ届いていません。ただ、HIVだから難しいというだけの問題ではなく、ヘッドカウント、予算その他の事情も当然あります。

予算やヘッドカウントの問題がクリアーされても、やはりHIVだと難しいという可能性はありますか?

あると思います。世の中にいろいろな人がいるように、うちの会社にもいろいろな人がいるわけで、何らかの理由で抵抗感をもっている人に対して、会社の方針がこうなっているのだからとか言って強引に進もうとしてもダメです。2例目のあとで、ハラスメントの事例集に「障害者雇用はわかるけれどもHIVは困る」という例文を載せるようにしたんですが、こういう発言はダメですよ、ここに書いてあるでしょ、積極的にやっってくださいと詰め寄っても良質なコミュニケーションにはならないと思います。むしろ、その人がどんな抵抗感を持っているのかを良く聴き、それを払拭するためにはどうすればよいかを考え、対話を重ねていくことが必要だと思います。

感情まで含めた理解を得るプロセスでしょうか?

そうですね。以前の例なんですけど、ある部署長にHIVのかたの話を持っていったときに、HIVであるという点がポイントになったことがあります。その人に訊いたんです。今まで黙っていたけれど、もし私が実はHIVだって言ったら、どうしますかって。そしたら、それは大丈夫だって言うんです。何故ですかって訊いたら、私のことはよく知っているし、今まで普通に仕事をしてきたわけだから問題ないって。ということは、相手のことをよく知れば問題ないということになり、ここに、解決への力ギが潜んでいるような気がしました。つまり、理解すればいいわけです。知ればいいわけです。これは大きな発見でした。その人はその後、本や

インターネットでHIVのことを調べたんですって。偉いですよね。採用という結果には至らなくても、その人の理解が進むという収穫はあったわけです。だから、続けていれば少しずつでも積み重なっていくんですよ。

私はランドセルが黄色で、いじめられもせずに育ったので、ある意味、他人のことを気にしなかったり、他人の気持ちに疎かったりするところがあります。自分がいいと思えば突き進めるのだけれど、本当にいろいろなことを思う人かいるんだなあと、この題材を通して経験しました。

私たちは、直接陽性者とかかわることが多くて、企業の人事の立場とは違った情報や経験を持っていると思うのですが、どんな情報があると役に立ちますか?

若干でもポジティブに捕らえている人は、感染者の体験談など、実感のともなったものに心を動かされるのではないのでしょうか。それから、ある程度意識の高い人にとっては、偏見の実態なども有効だと思います。良い方法がどうか分かりませんが、世の中一般のひどい状態を訴えることで、ある意味自尊心がくすぐられるということがあるかもしれません。

痛みに対する共感、無意識のうちに加害者になってしまうかもしれない自分というものを意識化させるということでしょうか。

そうかもしれません。HIVに限らず、自分がマイノリティーである特性を持っている可能性は人間誰しも高いわけです。そのことを他人には言いたくなかったり、興味本位で取りざたされたり、差別されたりしたくない、という何かです。自分にもそういうことがあるんだと認識し、だから他人のそういうことには敬意と誠実さをもって接しようとする心がとても大切だと思います。

最後に、今後の課題を聞かせていただけますか?

ひとつひとつ成功例を作っていく。そのことで、理解と信頼の輪を口コミで広げていく。場合によっては、すでに働いてくれている免疫機能障害のかたに手伝ってもらって、可能性のありそうな部署の人に来てもらうようなことも、あるかもしれません。

現実と直面するしかないですよ。実際に恐れや偏見があるんです。けしからんというのではなく、その現実と向き合って、逃げないで考えて経験しない限り進まないと思います。世の中にはネガティブ情報があふれています。偏見を受けたとか、苦勞をしたとかという情報が多くて、ポジティブ情報が少ないんです。ポジティブ情報というのは、ポジティブ事例が増えない限り増えないでしょう。だから、具体的な事例を作っていくことです。

いま、うちの会社は大きなうねりの中で、異質なものがぶつかりあうという局面に立っています。これもまた現実で、この状況に向き合っていくことで道が拓けると思うのです。

感染者と企業が何らかの形で出会う。出会わなくて、世の中が変わることはあり得ない。雨降って地固まる、と言いますが、きょうび、雨が降らずに地が固まることはあり得ないと思います。いかに良質の雨を降らせ、経験するか、また、経験する人を増やせるか、です。

どうもありがとうございました。

田口弘樹写真展 LIVING TOGETHER manual 発刊を記念して

ゲイ雑誌グラビアで活躍中の人気カメラマン、田口弘樹氏が小冊子『LIVING TOGETHER manual』のために撮りおろした写真を中心にした写真展が開催されました。1月26日から2月1日の一週間にわたり、新宿二丁目にある、ゲイコミュニティ向けのHIV啓発・コミュニティセンター「akta」にて行われ、300名以上の来場がありました。(主催：ぶれいす東京 Gay Friends for AIDS)



田口弘樹プロフィール
1985年よりフリーカメラマンとして、コマーシャルフォトなどを撮る傍ら、『G-men』の創刊を機に、ゲイ雑誌の撮影に携わる。『ゲイスタイル』(伏見恵明著・河出書房)の写真を担当する。

Living Together 手紙プロジェクト

この展示会に向けて書かれた、HIV陽性者や周囲の人からの手紙が同時に公開されました。20名におよぶ人たちの自筆の手紙をカラーコピーして和綴りにしたものが会場に置かれていて、手に取って、見て、読んで... HIV/AIDSとすでに共に生きている、私たちの今を感じることができたのではないのでしょうか。さらに、写真展の来場者にも手紙を書いてもらい綴じ込まれて増頁しながら、大阪・名古屋の写真展会場をまわっていきます。

リーディング・イベント

1月31日に記念イベントとして、Living Togetherなど、HIV陽性者や周囲の人の手記のリーディングが行われ、当日は100名以上の来場がありました。さまざまな立場でゲイコミュニティに関わる人たちが、一編ずつ手記を読み、コメントをしてもらおうという企画。

ハッテン場に行く陽性者の手記を、ハッテン場の店員が読む。息子にHIVをカミングアウトされた母親の手記を、息子にゲイであることをカミングアウトされた母親が読む。パートナーをHIVで亡くした人の手記を、他の原因でパートナーを亡くした人が読む。服薬に影響をされながらも楽しく日々を送っている陽性者の手記を、HIVの診察をしている医師が読む。ゲイバーのマスターやドラッグクイーンも参加し、バラエティーに富んだ顔ぶれとなりました。

つきあい始めた相手に、意を決してHIVをカミングアウトするという手記を選んだ、作家の伏見恵明さんが「切なさって大事だと思う。時には笑いでいい。気持ちにそって輪が広がっていくのだから」とコメントしていたのも印象的で、まさに笑いあり、涙あり、絶句!?もありの、感動的なイベントでした。(報告：矢島 嵩)

「このイベントに参加して」 akta 事務局員 張 由紀夫
ぶれいす東京主催の田口弘樹展がaktaでおこなわれました。

ぼくは、本当にいいプロジェクトにR2(Rainbow Ring)のメンバーとしても、aktaの職員としても関わったと思っています。とてもうれしいです。

以前にaktaで、My First Safer Sexという展覧会をやっていた時にも思いましたが、ナマの言葉を伝え合うことはほんとうに大事なことです。

あまりふだんはエイズ・イシューに興味を持たない友達も、あのHIV陽性者の皆さんの手紙の本を読んだ後には、何かじっと考えるような顔をして、黙って頷いて帰っていきました。後で誘ってくれてありがたうってメールが届きました。

これから、私たちが予防啓発を進めていく中に「HIV(陽性者)と共に生きてるし、やってくんだ」というベースを持ち、またそれをヴィジュアルライズしていくこと。そう言うことがやっていければいいなとつくよかったです。

展覧会には約300人の人が来てくれました。リピーターも多かったです。友達を連れて再訪してくれる方もおられました。朗読会も大盛況でした。来訪者と話をしている、感染者を亡くされたり、友達に持っているヒト、HIVに深い関わりを持っている人がこの町にもたくさんいるんだなあってことを感慨深く思ったりもしました。

一度語り出すと、ほんとうにたくさんの思いをこの病気に対して抱いている人がたくさんいることもわかりました。なんだか、蛇口のようなプロジェクトだなとも思いました。感情の、経験の、思いでの出口を探り当てて水を流れさせる装置を持っているような。

aktaでの写真展は終わったのですが、お手紙プロジェクトはこのままaktaで続行されることになりました。布張りの「Living Together Letters」とManual、便せんとポストボックスはずっと置いてあります。こうした形で、このプロジェクトとぶれいす東京の皆さんと関係を持ち続け、作り続けていくことは、R2にとっても、aktaにとっても、非常に重要で、これこそ望んでいたことだと思いました。どうぞよろしくお祈りします。



写真展の会場「akta」



和綴りにされた手紙と便箋

お知らせ

大阪と名古屋でも開催されます。

【大阪展】

日時：2月28日(土)～3月7日(日)

「DISTA」のオープン時間内

* 2月28日(土) 18:00 intro.special

* 3月6日(土) 20:00 Read・ing

会場：「DISTA」大阪市北区堂山町17-5 巽ビル211
(TEL 06-6361-9300)

主催：ぶれいす東京

MASH大阪 <http://www.mashweb.com/osaka/>

【名古屋展】

日時：6月5日(土) 12:00～17:00

6月6日(日) 10:00～16:00

主催：ぶれいす東京

NLGR http://aln-nlgr.cside.com/door_js.htm

新宿アルタ前広場、エイズデーイベント

行政(厚生労働省、文部科学省他)、企業、NGOの連合によるはじめてのエイズデーイベントが新宿東口のアルタ前で開催され、ぶれいず東京も参加しました。ステージとブースでの共同キャンペーン、街頭コンドーム配布などが行われ、3時間で、2万個以上のコンドームが街行く人たちに手渡されました。



新宿駅前でコンドームを2万個配付

11月30日の新宿アルタ前でのイベントではぶ PEPメンバーからは4人が参加しました。ぶ PEPの活動の一つであるメール相談を活かし、イベント会場では若い人が気軽に立ち寄れるような「相談コーナー」を作りました。「相談コーナー」に来た人は2名でした

が、その他、メンバー募集のちらしや、セックスクイズ、コンドームの正しい使い方を書いたチラシを配りました(もちろん、ぜひとも、ぶ PEPに!!と思われる子を狙って)。メンバー募集のチラシだけでは受け取ってくれる人が少なかったのに、クイズやゴムの使い方を楽しく書いてあるチラシ(ほしい方はぶ PEPメンバーまで!)を付けると、受け取ってくれる人が格段と多くなったように思います。情報が欲しいって子はたくさんいるのね~と実感しました。

今回のような大きなイベントで、ぶ PEPがどのように関わられるのか、課題の残る経験ではありましたが、生・飯島愛ちゃんが見られてうれいミズでした。(文責:ミズ)



ステージではドラッグによるSafer Sex Show。メロウディアス(上)とG.O.Revolution(下)による「あなたにもできる四十八手」



アルタ前に設置されたブースにて。ぶ PEPとシニアメンバー

NGOからの参加はぶれいず東京&レインボーリング。飯島愛さんらのトークに続いて、ドラッグによるSafer Sex Showを展開して大うけ、思わず急ぎ足をとめて携帯片手に迫ってくる人の群れって感じ。リーバイストラウス社からは100人ものボランティアが参加、デリヘルボーイズとともにコンドームを配布、あっという間にはけちゃいました。雨の予測が曇天で暖かく、絶好の街頭活動デー。

お堅いお話ばかりの従来型行政キャンペーン、大脱皮、大変身の日でした。(文責:池上)

学会探訪

第17回日本エイズ学会学術集会とその周辺

第17回日本エイズ学会学術集会・参加感想文 福原 寿弥
今年も日本エイズ学会が、世界エイズデーを目前に、11月27日(木)~29日(土)の3日間、神戸国際会議場で開催されました。

昨年までは、自分の発表の準備や他のスタッフの(ほんの少しですが)お手伝いで、心も体も慌ただしく学会場へ滑り込んでいましたが、今年はそういった準備が無く、余裕を持って参加できる予定でした。

しかし、御存知の方もいらっしゃると思いますが、今回の学会は当初、第7回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(ICAAP)と共同開催の予定でしたが、昨冬、世界規模で流行したSARSの影響をうけ、国際会議の方は05年に延期となり、日本エイズ学会の単独開催が決まったのが6月末。そこで事務局の準備期間も短くなり、講演抄録集が当日配付ということになりました。通常、学会で何を聴くか、事前に配布されるこの抄録集をみて決めているのですが、今回はそれができないことに!?ところが、事務局ではちゃんとホームページ上にプログラムを載せておいてくれました。細かい内容の確認まではできませんでしたが、演題名や演者名を見て計画をたてることができました。事務局の苦勞が垣間見られる、印象的な出来事でした。

会場は大小合わせて7つ設けられており、3階に第2会場、4階に第3会場みたいに、少々まぎらわしいところはありませんでしたが、全体の移動距離は比較的少なく、便利な面もありました。なぜなら、前述の通り詳

しい発表内容が事前にわからないこともあって、主に午前中に組まれた一般口演(演者ひとりの持ち時間10分。テーマにあわせて、いくつかの演題が一つのセッションを組む。)について、興味のおもむくまま、今まで顔を出したことの無い分野にも積極的に参加してみよう!と考えて、同じ時間帯に組まれたセッションでも、演題ごとに各会場をはしごして回ったからです。

例えば、臨床検査のセッションでは、CD4やウイルス量に関する医療機関ごとの測定方法の違いについて、アドボカシーのセッションでは、医療・保健サービスや身体障害者手帳制度の利用状況調査について、歯科やカウンセリング、看護のセッションでは事例報告を...といった具合でした。発表は、議論が白熱して時間通りに行かないことがあり、予定時間に会場に入ってはみたものの聴けない演題もありました。しかし今回、こんな風につまみ食いする方法もあるんだなと思いました。

また、検査・受検行動のセッションにはほぼ全部参加して、我々にとって馴染みの深い、南新宿検査・相談室での利用者10年間の動向のまとめや、保健所での新たな試みの発表を聴きました。抗体検査は受けることで完結する訳ではなく、結果にあわせたその後の対応が重要であることを改めて考えさせられました。

これだけ挙げても、HIVが医療や保健、福祉の分野に広く、深く関わっていることがよくわかります。まさに、社会の鏡であることを再認識さ

せられました。

連日お昼からは、海外からの演者による特別講演（同時通訳あり）や、一つのテーマに沿って、その分野にかかわりの深い演者達が口演、討論するシンポジウムが組まれていました。例年のことですが、このシンポジウムを選ぶのも一苦労で、聴きたいテーマが幾つも重なり、涙をのむこともしばしば。そんななか今回目立っていたのは、抗HIV薬の選択に関連したシンポジウムで、ガイドラインの改訂や新薬導入にあわせて、内外の演者により幾つも組まれていました。もうすぐ日本にも、抗HIV薬一日一回服用の時代が来るようです。また、エイズ学会では初めて扱うテーマだったようですが、薬物の使用・依存についてのシンポジウムも、貴重な問題提起と思えました。

会長講演のテーマは「疫学から社会疫学へ」ということで、HIVの予防には、単に統計学的な数字の研究のみならず、それを社会的に適應させていくことが重要であるという内容でした。そのことは特別講演や国際シンポジウムにおいても触れられており、HIVは、その地域に住んでいる私達にとって共通した問題であり、医学的側面だけではなく、社会的・文化的・政治的理解が不可欠であるとのことでした。

ぶれいすでの仕事の関係で、最終日には参加できませんでしたが、見聞きした範囲内だけでも、またひとつ新たな時代に入ったことを実感できる学術集会でした。医療・保健・福祉の現場で努力されている方々に畏敬の念を抱きつつ、CBO（Community based Organization）ぶれいす東京の一員として、今、我々にできること、我々がすべきことについて、改めて考えさせられている今日この頃です。

日本エイズ学会に参加して

葦田 竜也

第17回エイズ学会は2003年11月27日から29日の日程で開催されました。場所は神戸国際会議場。今回の学会は生まれて初めての連続でもありました。

神戸という街も初めてでしたが、学会発表も初めての経験でした。

私は今回、2002年にぶれいす東京で取り組んでいた男性同性間のコンドーム使用/不使用に関する研究の成果を発表しました。この研究は厚生労働科学研究補助金・エイズ対策研究事業の一環で行われ、ぶれいす東京はエイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究の一部としてまとめられています。ぶれいすのみなさんにも色々な場面で協力していただき、その結果、300人余りの男性同性愛者/両性愛者に質問票を配り、質問項目も100をこえる大きな調査となりました。調査結果の内容の詳細は研究報告書にゆずるとして、制限時間7分の限られた時間の中で本研究のエッセンスを熱く語ってきたのでした。

この調査で明らかになったのはコンドームの使用は実に様々な要因に左右されるというものでした。その中で特に周囲の雰囲気や場の流れが大きく関係している他、HIV/エイズや性病に対する楽観的なムードなどが、要因として抽出されました。特に楽観的態度は最近アメリカで再び声を大にして語られ始めています。これらの複雑な要因をどう整理して、実際のコンドーム使用に結び付けていこうかが課題ですが、特に日本の都市部では出会いやセックスが以前よりもたやすく手に入るようになってきており、若い世代にとってはHIV/エイズも含めた性病予防はさけては通れないことを改めて実感しました。

私はもう1題発表したのですが、それは修士論文として手がけたテーマでやはり男性同性愛者/両性愛者のコンドーム使用の意志がどういった心理的要因によって左右されるかを調べたものでした。この研究において、リスクの高い行為はステディなパートナーとの性行為で起きやすく、またコンドームの使用はその着用の上により強く影響をうけていることがわかりました。ここでは私は既存の行動変容モデルを使用したのですが、そのようなモデル自体を提案しようという意欲的な演題が東

京大学の井上氏によって発表されました。HIV感染者の性行動時のコンドーム使用意図を調べており、こちら170人の方から回答を得ることが出来た、画期的な調査といえます。

同じ枠からは日本だけでなく、ネパールとイランからの報告もありました。ネパールの演題は私と同じように行動変容モデルを使用し、ネパールの思春期の若者を対象にエイズ予防のための禁欲意図を調べています。イランからの報告は薬物中毒者のリスク行動及び態度を調べたもので、他の演題がどちらかといえば統計を使用して分析を行った量的研究であるのに対し、この研究はインタビューを中心とした質的研究です。イランはイスラム国家であり、HIV/エイズの問題をおおびらに語るには難しい状況にあるといえます。薬物を乱用している人はリスクの高い性行動を取りやすいことが報告されますが、この発表では大きく触れられてはならず、やはりイスラム国家でそのような話題まで突っ込んでいくのは困難であることがうかがえました。

さて、近年エイズの流行は当初の予想を上回る勢いです。今年については400万人を越える感染者が報告され、特にアフリカの一部ではもうこれ以上に増加はありえないという理論上の臨界点を越える感染率が報告されました。まだ足りないとはいえ、エイズには大きな資金がつくようになってきたにも関わらず、効果的な対策が一向に積みあがらないという印象を抱きます。

今回、行動・意識調査の枠においては現状については良く調べられており、分析手法もハイレベルなものでした。しかし、今後はそれらの結果を用いてどのように成果をだしていくかが課題になってきている気がします。現状調査の蓄積だけでなく行動の蓄積も必要ですが、コミュニティをターゲットにしているNGOは今後特に後者に焦点をあてた活動を意識することが重要であると感じました。

シンポジウム「サポートグループのあり方を考える」 生島 嗣

当日は、今までのエイズ学会にはない、幅広い領域からのスピーカーを招いて開催され、会場には100人前後の聴衆が参加していた。

学会抄録には、「HIV感染/エイズ、血友病、糖尿病、ALSのサポートグループのマネジメントに関わる人々をシンポジストに迎え、サポートグループのこれまでの経緯、グループにおける語り、マネジメントについて以下のような経験を共有したい」とある。

若生氏（ケアーズ）は、血友病患者や家族が中心となっている組織でありながらも、声に出す難しさをいかにクリアしつつ、活動してきたかを報告していた。ALSの当事者である吉岡氏（KAMON）は、自らの経験談もまじえながら、立ち上げ間もないグループの歩みを紹介して下さった。また、高柳氏は、糖尿病患者グループを支援する立場から、医療費負担の大変さ、また生活上の課題などを、写真を交えて紹介して下さった。

生島は、これまでのぶれいす東京の活動を、サポートグループのオーガナイザーという視点で、振り返る機会となった。ネスト設立当時は隠れ家的な存在で、昼食を囲みながらの団らんを来所者に提供していた。現在では、当事者も一緒に運営側に参加してもらい、安全に交流可能な場をつくるという目的でプログラム開発に取り組んでいる。外との壁をあつく張り巡らしていた時代から、多様な参加者どうしの違いをどう乗り越えるのかという風に、運営にかかわる私たちの問題意識も大きく変化している。

座長：小西加保留（桃山学院大学）

コメンテーター：森綾子（宝塚NPOセンター）

シンポジスト：若生治友（ケアーズ）、生島嗣（ぶれいす東京）、吉岡克彦（KAMON = 関西ALSメンバーおいでネット）、高柳富美江（長野丸子中央総合病院糖尿病患者会「若葉会」保健師）

「2005年」にむけて

兵藤 智佳

2003年度に神戸で予定されていた「アジア・太平洋エイズ会議」は、SARSの影響のために2005年に延期になりました。そのため、今回のエイズ会議では、「国内的な演題の発表」だけでなく、この国際会議延期によって失ったものをできるだけ「埋め合わせる」ための国際的な関連企画も実施されました。国際会議実行委員である私は、エイズ会議期間中は、それらの関連企画のみの参加になりました。具体的には、アジアのNGOのリーダーたちが、自分たちの経験を語る形でのシンポや勉強会です。今回は、その報告をします。

私が参加したセッションで、印象的だったのは、まず、日本・アフリカ協議会が中心で企画した薬のアクセスに関するものです。そこでは、「政府へのロビー活動を展開して薬価を劇的に下げたタイの感染者団体のリーダーのお話」がありました。セッションでは、彼自身が全国の感染者の団体をまとめた苦労だけでなく、彼を支えた「医師」によるスピーチも行われ、「多くの人々が連携して、大きな動きをつくりだした有機的な活動」が紹介されました。「大切なのは、政府を批判することなく、対話をする、支援者を増やすこと、そのための努力をすること」という彼のお話は、歴史や文化的な背景が違っていても、とても示唆に富むものだったように思います。「当事者が声を挙げ、それを支える支援者がいる、そして、それが政策を動かす」というダイナミックな動きは、ぜひ、いろいろな形で、日本でもさらに発展させていきたいものです。

また、アユースとシェア（日本のNGO）は、「移住労働者と HIV」に関する勉強会を企画し、マレーシアで「アジアの移住労働者と HIV」のネットワーク活動を行っているカラムアジアの代表による講演会を開催していました。80～90年代、アジアの移住労働者による HIV 感染は、「セックスワーク」という文脈において語られてきました。しかし、現在、グローバル化が進行し、アジア地域でも「家政婦や現場仕事」で国境を越える人が増え続けています。これらの、人々は、「正規滞在ビザ」がないことも多く、また、あったとしても社会的に弱い立場にあり、HIVに感染しやすい危険な状況におかれています。特に、フィリピン人などの家政婦が、「家庭での雇い主による暴力」によって感染している可能性があることが報告されたことは、印象的でした。日本は、移住労働者の受け入れ国です。私自身も、「共生」することのできる社会とは、どういうものなのか、日本に住む日本人として考えて続けていきたいと思っています。

2003年の国際会議は延期されましたが、2005年には開催の予定です。今回、アジアで活動する NGO 活動家たちと再会し、また、共にがんばろうと励ましあえたことは、収穫でした。たとえ会えなくても、「あそこでも、がんばっている人がいる」と思えること、それは、創造的なエネルギーです。ネットワークの意義は、そういうことなのだと思います。

ユース・フォーラム 2003 in 神戸の報告

柳田 知子

11月29日～30日にユース・フォーラム 2003 in 神戸に参加してきました。SARS 問題で第7回 ICAAP は延期になってしまいましたがそんなときだからこそ、今、私たち若者が HIV/AIDS 問題に対してできることは何か考えたい、共通課題に取り組んでいるもの同士でネットワークを広げ、経験を共有する目的で私たちユースは2003年の神戸に集まりました。29日に神戸国際会議場で行われた「語る HIV/AIDS つながる私」では日本・海外のユース活動家のスピーチ講演会で、彼らはそれぞれ独自の活動方法論を語りました。インドネシア、タイ、日本のユースはアプローチの方向・方法は違って、いかにエイズを身近な問題として捉えてもらうかに力を入れています。これは、PEP にもいえ

ることで、HIV/AIDS 問題は以前ほど注目されず危機感を覚えることがありましたが、私たち以外にも色々な団体のたくさんのユースがこの問題に取り組んでいることを実感し、勇気づけられました。また同時に、つながることが個々をエンパワメントしていくのだ、と痛感しました。このユースフォーラムに参加したことで私自身今まで以上に、PEP へのモチベーションが高まったのでした。

PLWHA フォーラムに参加して

山口 一夫

抗 HIV 薬を使える日本・韓国・台湾の状況は国際会議等では注目されにくい。そこで北東アジアにおける陽性者の問題を共有し、今後の協働のあり方を検討する「JaNP+・PLWHA フォーラム」が開催された。世界の陽性者ネットワーク・各国の状況についての発表の後で、北東アジア地域の当事者（陽性者）ネットワークの可能性について意見交換が行われた。

スピーカーは JaNP+ 代表の長谷川の他に、治療アクセスプロジェクト「バイヤーズ・クラブ」代表のグレッグ、台湾代表兼 APN+ 議長のホセ、韓国代表のリー、APN+ アドバイザーのエドが招かれていた。参加者の構成は、血液製剤による陽性者、性感染による男性/女性陽性者、および JaNP+ の活動に協力をして下さっている医療従事者（医師・カウンセラー・社会福祉士）等だった。

参加人数が25名程度と少数だったので、グレッグの提案で、教室形式の席の配置を変え、スピーカーも含めてイス取りゲームのようにまわっての進行となった。最初に全員で自己紹介をした。陽性者の多くが HIV 関係の NGO に携わっていたが、大阪の女性陽性者2名が「特に何も活動していない“ただ”の陽性者ですが、なんとなく来てみたい来てました」と自己紹介して爽やかな印象を与えた。

ここで簡単に各国の状況を紹介する。

台湾：治療を始めた人の10%がドロップアウトしてしまう。また、報告者数の60%がバイセクシャルと答えているが、そのほとんどが本当はゲイであると考えられている。心理的サポート等の重要性が認識されておらず、当事者（陽性者）の声が反映されていない。医療・薬剤以外のサポート、特にピア・サポートが重要である。また今回の参加者の中に台湾で HIV 感染が判明した陽性者がいて、判明後日本に強制送還されてしまった経験を話してくれた。

韓国：感染が判明した人の携帯電話に登録してある電話番号に電話をして検査を勧めるという“追跡”手法により感染がわかるケースがある。それが強制的なものか詳細はわからないが、一般的に陽性者のプライバシーを守るといった概念がなく、陽性者の実名が地元の新聞に掲載してしまうことがある。陽性者団体を国が認めてくれないので、国に対して訴訟を起こす準備をしている。

中国：中国は推計100万人の陽性者がいるにもかかわらず、陽性者団体は片手に余る程しかない。麻薬の密輸ルートに沿って感染が拡大しており、感染経路の65%以上が IDU（注射器による薬物使用）である。結社の自由が尊重されておらず、陽性者の現状は非常に厳しい。

意見交換では北東アジアネットワークの必要性が認識され、現実的な協働から始めることが確認された。具体的にはメーリングリストを立ち上げることになった。治療アクセスの点で大きく異なるが、中国も参加すべきであると確認された。台湾で作成した北京語のパンフレット等の資料を提供することから中国との協働が開始できると発言があった。

最後に、長年活動を行ってきた、HIV 薬害訴訟大阪原告団の花井十伍さんの「難しいことは良く分からんけど、まず皆で会おうや。こうして顔を合わせてからの話やで。」という言葉が心に残った。

活動報告

各部門より

ホットライン

ホットライン・ミーティング実施状況 ()内は出席人数
9月

- 8日 東京エイズ相談連絡会
「セクシャリティーの理解」(7名)
- 12日 東京都電話相談連絡会(3名)
- 21日 スタッフミーティング(11名)
ケースカンファレンス

10月

- 10日 東京都電話相談連絡会(3名)
- 25日 スタッフミーティング(10名)
自主勉強会「強迫性障害を学ぶ」

11月

- 14日 東京都電話相談連絡会(3名)
- 16日 スタッフミーティング(15名)
自主勉強会「ベトナムのHIV/AIDS問題」

12月

- 12日 東京都電話相談連絡会(3名)
- 15日 東京エイズ相談連絡会
「世界エイズデーの実践報告」(1名)
- 20日 忘年会 & 新人歓迎会(13名)

相談実績報告

ぶれいす東京エイズ電話相談

	日数	総時間	相談員数
9月	4日間	16時間	のべ12人
10月	4日間	16時間	のべ12人
11月	5日間	20時間	のべ15人
12月	4日間	16時間	のべ12人

	相談件数 (男性)	女性	陽性者)	1日平均
9月	36件 (25件)	11件	1件)	約9.0件
10月	30件 (24件)	6件	1件)	約7.5件
11月	32件 (29件)	3件	0件)	約6.4件
12月	36件 (35件)	1件	1件)	約9.0件

東京都夜間・休日エイズ電話相談 (委託)

	日数	総時間	相談員数
9月	12日間	36時間	のべ42人
10月	13日間	39時間	のべ40人
11月	11日間	33時間	のべ33人
12月	11日間	33時間	のべ34人

	相談件数 (男性)	女性	陽性者)	1日平均
9月	250件 (200件)	50件	0件)	約20.8件
10月	245件 (198件)	47件	0件)	約18.8件
11月	216件 (180件)	36件	1件)	約19.6件
12月	247件 (203件)	44件	0件)	約22.5件

円熟、とでも言いましょうか。各スタッフとも経験・スキル共に成長し、結束も強く、高いレベルでの相談援助が日々展開されています。しかし一方で、相談件数は従来を上回る増加を見せ、内容もより複雑化し過酷な現状を反映しています。我々の活動が社会に対して何らかの一助となることを願いつつ、受話器に向かう昨今です。

ぶ PEP

ぶ PEP ミーティング実施状況

- 9月 4日 定期ミーティング
- 10月 7日 定期ミーティング
- 11月 6日 定期ミーティング
- 12月 2日 定期ミーティング

その他

- 10月 11日
「HIV 感染予防の効果に関する研究」成果発表会参加
(パネリスト4名・運営補助3名)
- 11月 22日
メール相談研修会 @ 早稲田大学新学生会館
(講師：池上千寿子 10名参加 うちオブザーバー3名)
- 11月 29 ~ 30日 ユース・フォーラム in 神戸 (1名参加)
- 11月 30日
エイズデーイベント @ 新宿アルタ前 (4名参加)
詳細はP10参照

メール相談件数

	相談件数 (女性)	男性	不明)
10月	12件 (11)	1	0)
11月	14件 (10)	3	1)
12月	7件 (6)	0	1)

10月から、相談メール対応が本格始動しました！

多くの相談者の若い子たちは、性に関して身近に相談できる人や確かな情報源をもたずにいるようです。そしてそれらの不安は携帯メールを通して送られてきます。携帯メールという匿名性の高いツールは若い子にとって「性の悩み相談」にはぴったりなのではないでしょうか。対応スキルをアップするため、池上さんを講師に迎え、研修会も開きました。ぶ PEP は毎日ますます進化してきますよ

ボディ

ボディ担当者ミーティング参加スタッフ数

(第1木曜 11:00 ~ 第3木曜 18:30 ~)

9/4	2人	9/18	7人
10/2	4人	10/16	6人
11/6	5人	11/20	7人
12/4	4人	12/18	7人

利用者数 (2003/9 ~ 2003/12)

6カ所の病院に通院中、もしくは入院中の18名の方に27名のボディスタッフを派遣。

新規派遣

引越越しの手伝い	2件
入院中の洗濯	2件
入院中の洗濯・外出介助	1件
自宅への定期的な訪問	1件
合計	6件

訪問先 (2003/12月末現在)

在宅訪問 11

病室訪問 3
在宅への電話のみ 1

派遣終了

入院中の洗濯 2件 (入院中のみ短期派遣、退院による終了)
入院中の洗濯・外出介助 1件
(退院による終了、今後については依頼待ち)
引越しの手伝い 2件 (ニーズの消失)
合計 5件

パディ担当中のスタッフ構成 (12月末現在)

女性 13名 男性 4名

パディ・ワークショップ

9/14 (日) に開催、参加者 6名

パディ・フォローアップトレーニング

11/1 (土) 14:00 ~ 16:30、新宿区消費生活センターにて開催。
テーマ「身体に障害を持つ方への支援」
講師：おやかた (作業療法士)
参加者 10名

今回のテーマは「身体に障害を持つ方への支援」ということで、作業療法士の資格を持つ講師の方から、前半は障害の概念や自立支援について聞くだけでなく、参加者も色々と考えながらの分かりやすいお話をしていただきました。また、後半は実際に外に出て車椅子を使用している講習、杖について歩く方の介助方法などを教えていただきました。

参加者からは、実際に乗ってみると車椅子の方の目線があり、乗ってみないと判らない怖さがあった、などの感想がありました。また、こうした研修を定期的に開催していきたいと思います。

パディの現場から

9月~12月にかけて新規依頼が多くありましたが、9月のワークショップ修了者の方に早速活動していただいたり、しばらく活動のなかった方にピンチヒッターで活動していただいたり、いろいろな方に協力をいただき派遣を調整することができました。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。今年もよろしく願いいたします。

ネスト

ネスト利用状況

オープン日数	延べ利用者数 (うち新規) (うち積極的な参加*)
9月 27日	162名 (5名) / (3名)
10月 26日	113名 (3名) / (8名)
11月 26日	115名 (5名) / (5名)
12月 25日	134名 (3名) / (6名)

(*積極的な参加とは、新人ピア・ミーティングのファシリテーター、web NEST 運営委員会、お茶会・講習会の企画や主催など、ネストの運営やプログラムに積極的に関わっていること)

ピア・グループ・ミーティング (PGM) / ミーティング

- ・新人ミーティング第14期 (参加者 6名)
9/6 9/20 10/4 (修了)
- ・新人ミーティング第15期 (参加者 7名)
11/15 11/29 12/14 12/23 (修了)
- ・PGM ファシリテーター・ミーティング
(ピア・ファシリテーター、スタッフ・ファシリテーター)
10/16 (3名、3名)
- ・陰性パートナー・ミーティング
9/13 (2名) 10/11 (2名) 11/8 (3名) 12/8 (3名)
- ・ミドル・ミーティング
9/13 (6名) 10/11 (2名) 11/8 (8名) 12/8 (4名)
- ・グリーフ・ワーク
9/22 (準備会) (2名) 10/27 (1名)
- ・もめんの会 (HIV/AIDS を支える母親の会)
11/21 (2名)
- ・web NEST 運営委員会
(陽性者メンバー、オブザーバー、ぶれいす東京スタッフ)
9/26 (1、1、2)

10/24 (2、1、2)

11/21 (2、1、2)

12/19 (4、0、2)

ネスト・プログラム

9/23 JaNP+/ぶれいす東京共催プログラム
PLWHA ミーティング「患者のQOLと自己決定」
(参加者 40名)

10/4 ネスト庵初秋のお茶会 (ご亭主、参加者 9名)

12/20 ネスト年末パーティ (参加者 20名)

ネスト年末パーティ

今年もネストで年末パーティが開かれました。軽食とシフォンケーキ、果物などを用意。池上さんも参加して、午後の2時間あまり歓談の時を過ごしました。お腹がいっぱいになった頃、ネスト庵のご亭主がお茶をたてて、しめてくださいました。

軽食の準備・盛りつけや会場作り、デジカメ撮影、後片付け、新たなイベントの発案など、ご参加・ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

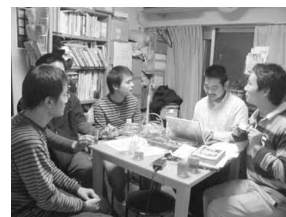


年末パーティ

Gay friends for AIDS

Gay Friends for AIDS 電話相談

9月 9件 (平均 2.25件)
10月 9件 (平均 2.25件)
11月 5件 (平均 1.0件)
12月 9件 (平均 2.25件)



いつもにぎやかなGフレのミーティング

LIVING TOGETHER 配布

LT 730冊
マニュアル 1800冊

コンドーム配布

8月~12月 2200個

Voice03 (詳細報告はP3)

11月29日 於：新宿区立四谷区民ホール
観客動員 411人 出演者 72人 スタッフ 53人

タートルズ始動

12月27日 於：ACE
初心者ゲイ向けのクラブイベント
WannaPartyに、ゲイによるゲイのための啓発ユニット、タートルズが出演
観客 117人



タートルズのロゴ

田口弘樹写真展

1月26日~2月1日 於：『akta』
ゲイ雑誌グラビアで活躍中の人気カメラマン、田口弘樹氏の写真展。LIVING TOGETHER manualのために撮りおろした写真を中心に展示 (詳細報告はP9)

HIV陽性者への相談サービス

相談実績

2003年度	9月	10月	11月	12月
電話による相談	50	38	32	44
面談による相談	25	26	10	12
E-mailによる相談	66	45	44	25
うち新規相談	8	12	8	10

新規相談者の情報入手経路 (9~12月集計) 38人

・インターネット	17
・南新宿の紹介	3
・医療従事者	3
・他の HIV 陽性者	2
・予防財団	1
・akta	1
・他の NPO	1
・パートナー	1
・Gay Friends for AIDS 相談	1
・不明	8

相談内容

【告知後】

告知直後の不安・体調の変化等
 初期治療がインジナビルスタート
 生命保険の加入について
 恋人がポジティブ、結婚・子供づくりは？
 他の HIV 陽性者と会いたい
 セイファーセックスの範囲は？

【就労】

健康保険の利用、会社健診で異常の指摘
 求職活動を一般 / 障害者枠で？
 自分の適性について / 就労訓練について
 自分がリストラの対象になりそう
 職場で隠している心理的な負担について
 派遣先と派遣元との間で
 勤務時間が不規則
 公務員や福祉職のプライバシー不安
 住民税と障害者控除の関係について
 職場で混乱して退職に
 専門学校に受講を拒否された
 上司に告知したことで、ストレス増に
 はじめて入院、職場の上司がきた時の対応

【生活】

東京で生活したい
 養子縁組の生活保護への影響は？
 マンションの購入について
 サイトメガロウイルスの網膜症の後遺症での不便さについて
 療養のための施設はないのか
 遺言の残し方 / 障害年金について
 手当ての支払い手続きにミスが
 退院後の通院のつきそいが必要
 人工授精について、子づくり
 引っ越し / 誰にどう手伝いを依頼する
 ボランティアの派遣について
 リハビリ施設の利用期間を限定された
 支援費制度について知りたい
 家賃補助制度を利用したいが条件が合わない
 本人が亡くなって、借家をでない

【医療】

まだ病院に通院していない
 風邪で近所の医者に行くのは？
 地方の医療機関に関する情報が欲しい
 服薬開始、飲酒などとの関係は？
 主治医以外のスタッフの親切が迷惑
 サイトメガロウイルス治療の副作用で大変
 低血糖になってしまった
 精神科と内科の両立について
 口内炎がひどい / 体調の変化
 人工授精について
 外国からの帰国後の医療について
 ずっと治療を拒否していたら発症してしまった
 セカンドオピニオンを希望
 浮気をしているようで抵抗感が
 新薬の認可の状況を知りたい
 副作用が強い。医療との関係をどうするか

田舎に暮らしているのでどうしたらいいか
 歯科にかかりたいが、どうしたらいいか
 一般医療機関で風邪で受診したら拒否された
 自分は超過滞在の外国人、医療費が不安
 東京にいき、迅速検査法で検査を受けたい
 民間療法は？
 医療従事者と家族の動きに不信感
 インフルエンザの予防接種について
 最初に通院した病院の居心地が悪く病院を転々としてしまっている
 精神科と内科の利用について
 外来の「仕事はしている？」がプレッシャーに
 痔のオペはどこがいいの？

【メンタル・人間関係】

セックスの相手から告知され混乱
 恋人ができそう / 告知をどうしましょ
 恋愛等の人間関係を広げたい
 告知後、一年で人間関係に閉塞感がある
 入院を機会にネットワークが広がった
 ネストにいくとゲイばかりで肩身が狭い
 近親者を亡くし治療意欲がなくなった
 同居者にボランティア団体にいくことを止められている
 専門職からの相談、知人に薬の相談をされ、調べると抗HIV薬だった
 薬物依存があるが、ナースにはその事実が話せていない
 パディに家を見られるのが恥ずかしい
 ストーカー被害後の不安
 他の患者グループにいったみた
 母親というだけでなぜ介護を？
 知人が自殺未遂をおこした。どうしたらいいか？
 他のお母さんはどうしていますか？
 母親が痴呆になり、つらい
 家族との人間関係 / 見捨てられ不安

研究部門

厚生労働省委託 厚生労働科学研究

「HIV 感染予防対策の効果に関する研究」

性教育指導者養成講座として、12月13・14の両日に(財)日本性教育協会と「授業のための実践セミナー」を共催、助産師・教師・学生・研究者・行政職員など幅広い層の参加を得ました。実施後のアンケートでも「参加型のセミナーで楽しくできた」等の好意的な意見が寄せられました。また、11-12月にかけて、高田馬場地区を始めとする都内全域の専門学校の意識調査を実施しました。



都内336校へ配付した冊子「AFTER 18の性の現状」

「HIV感染者の地域生活支援におけるソーシャルワーカーの連携に関する研究」

2つの研究テーマのうち、「肢体不自由を併せ持つ感染者の社会福祉サービス利用の阻害要因について」については、対象となるPWA/Hの方々にインタビューを進めています。「HIV陽性者の就労状況について」は、まず東京の病院の通院患者を対象としてアンケート送付を実施、今後他病院の結果と併せ集計・分析予定です。

エイズ予防財団助成 研究成果発表会

『若者を対象としたセクシャル・ヘルス・プロモーション』

10月11日に東京・新宿、11月28日に神戸にて開催。両日共、池上千寿子による「性の保健行動とジェンダー」及び東優子による「Sexual Healthとメディアの影響」の2講演を実施、併せてビデオ「Let's CONDOMing」を上映しました。10月11日にはこれに加え、ぷ PEPメンバー4名によるパネルディスカッション「Sexual Healthのすすめ How & Why?」も実施しました(詳しくはP2「成果発表会報告」をご参照)。

書評特集



「当事者主権」
中西 正司 / 上野千鶴子共著
岩波新書 2003年 700円

「自分たちのことは、自分たちで決める」というとてもシンプルな考え方が、実は、とても難しいことで、でも、「社会を変える大きな力」を持つことを教えてくれる本です。ここでいう「当事者」は、社会的に弱い立場に置かれている人たちのことと広く理解され、障害者、同性愛者、在日外国人など、多くのカテゴリーがあります。本では、その「当事者主権」という理念に関わる理論と実践の事例として「日本の障害者運動の歴史」がとりあげられ、彼らが、「自分たちで決めること」の重要性をどう考え、共有し、実践してきたかが詳しく解説されています。これらの実践は、患者の当事者運動など、その他の分野でも現在、起こりつつある「当事者主権」に向けて、多くの示唆と、勇気を与えてくれるものです。著者は、まさに、「障害者の当事者」の男性ですが、「あのフェミニズムの論客」、上野千鶴子が共著者でもあります。上野千鶴子がやっぱり気になる人にもおすすめです。(兵藤 智佳)



世界はエイズとどう闘ったか
宮田一雄著
ポット出版 2003年 2,000円

著者、宮田一雄氏は産経新聞のジャーナリストとして、1987年からエイズ問題の取材、報道に関わってきた人だ。副題に「危機の20年を歩く」とある。

本書には、ぶれいす東京の池上代表が度々登場、電話相談の話もしている。私がぶれいすの電話相談員として加わり9年が経つ。ボランティアの小さな力だが、約半分を歩いて来たのに驚く。又、文中紹介の、数少ないHIVアンテナショップの一つ、軽井沢ノーチェを訪ねたのは思わぬ縁による。森の中の静かな佇まい、オーナー木村夫妻の暖かな人柄を思い出す。こういう交流の場の在り方の難しさも書かれているが、ふえるとよいと思う。

HIV関係の情報が伝わってくる環境に居りながら、この本を読むと、知らないことが多いことに気づかされ、自分の勉強不足を感じた。宮田氏の冷静な視野は海外へも向き、20年の推移が判る様になっている。ネットによる情報が溢れる今、どれを信じてよいか迷う声をよく聞かすが、そういう人にも読んで欲しい。参考になる統計図、年表その他が載っているが、本文と色分けのページで探しやすい。

新たな感染症として出現したSARSは夏になれば終息する時期があるが、エイズの流行はゆっくり広がってゆくと宮田氏は説く。貧富の差のある国際情勢の中、改善されつつある方向に進んではいても、世界とエイズの闘いはまだ続く。まず自国各々が関心を持ち、医療面その他での感染者の支援、これ以上の増加を止める予防などの必要性を改めて思う。

(R・F)

編集後記

- ・2月号をお届けするのが遅くなってすみませんでした。(サトー)
- ・ぶれいすってこんなにいろいろなことやっていると、ニューズレターの編集をするようになってから知りました。紙面上でも、多彩な活動と多様な人たちの様子が伝わるとうれいです。(やじま)
- ・ぶれいす東京のお花見が、3月28日(日)に予定されています。どなたでも参加できますので、興味のある方はお問い合わせ下さい。(いくしま)



こんな夜更けにバナナかよ
～筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち～
渡辺一史著 北海道新聞社 2003年 1,800円

新聞の一面、毎朝、下の方の出版案内に必ず目がい

く。この変わったタイトルの本にそうやって出逢った。初めは患者の立場の鹿野氏のセリフが題名になっているのだと思っていた。明け方、お腹が空いた時に出されたのはバナナだった... みたいな。ところがこのセリフが思わず出たのがボランティアの側。ほとほと疲れていた日、ながらも夜の時間帯を担当していた当時の学生ボランティア国吉智宏(現・NHKアナウンサーだって!)がうとうとしていた真夜中に「バナナ食べる!」と起こされたその時のことだった。追い打ち(?)を駆けるように「もう一本!」と言われた時、不思議と直前の怒りがすーっとひいていく、「もうこの人の言うことは何でも聞いてやろう」という心境になったとのこと。

鹿野氏は、マスターベーション以外(ペニスは海绵体だから筋ジスでも勃つんだって。これもこの本で初めて教わった知識)24時間、他者の手なしには生命を維持できない1級の身体障害でいながら自己規制することがない。それは時に「わがまま?」と言う印象を周囲が持つぐらいの強烈さを放つ40歳として本書に登場する。が、彼は初めから障害者の中でスターではなかった。彼の変遷を知るのも本書を読み始めたら止まらない所以でもある。またボランティアと障害者、医療者と患者との境界の引けなさ具合、両者は交われば交わるだけよいものになるところも読み応えがある。著者も例外なく巻き込まれながら(遂にボランティアもした)しかもボランティアと鹿野氏の在る姿に自身がもった疑問、それは素朴に私たちも胸に抱いているような疑問なのだが、それを徹底的に明らかにする努力を止めていない。優れたルポルタージュ。是非ご一読を。(菱川 愛)



満たされない自己愛
～現代人の心理と対人葛藤～
大淵憲一著 ちくま新書 2003年 700円

人から自分が否定されたと感じたとき、私は落ち込みます。でも、そもそも、なぜ私は「自分が否定された」と感じ、それによって落ち込むのだろう。こんな私を「自己愛者」という言葉によってとらえらる.....。

大淵さんは、私たち自身の自己理解のために、共にこの社会を生きる隣人を理解するために、自己愛という言葉の持つ様々な意味を具体的にとらえています。印象的なのは、自己愛を単に否定的にとらえるのではなく、自己愛の持つ二面性(醜さと気高さ)を見つめていることです。人間が人を殺してしまうのも自己愛が起こすもの、強制収容所で自分のパンを人に分け与える行為も自己愛のなせる業。もし誰もがこんな自己愛のウラハラを持っているとするなら、自己愛という言葉と向き合っていくことは、私たち自身の、そして人間の奥行きを深さを理解する道であることに気づかされます。

対人関係で悩む人や支援に携わる人に、ぜひ読んで頂きたい本です。(大内 幸恵)

編集・発行: ぶれいす東京
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304
TEL: 03-3361-8964 (月-金 12:00~19:00)
FAX: 03-3361-8835
E-mail: info@ptokyo.com
ぶれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>
Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>
web NEST: <http://www.jade.dti.ne.jp/nest/>
Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>